「アンクル・サム」と「アンクル・トム」に見られる人種意識

日 吉 和 子

前回の紀要の中で述べているように，アフリカ系アメリカ人（以降黒人と呼ぶ）社会では，いわゆる白人に迎合したり，白人に従順な黒人男性に対しては "Uncle Tom" という言葉が用いられる。この言葉から男性の名前に "Uncle" を付け加えて否定的意味合いを持たせる黒人社会特有の用法が生まれた。一方白人に迎合する黒人女性に対しては，"Aunt Jemima" という言葉がよく知られている。しかし "Uncle" とは違い，"Aunt" の称号を名前に付けるだけで否定的意味合いを持たせる用法は希であるだけでなく，"Aunt" の付いた白人女性に対する慣用語句も無い。そこで今回は米国の主流社会の中で "Uncle" の称号の付いた慣用語句で，良く知られている "Uncle Sam" と言う言葉を通して人種について考えてみることにする。

"Uncle Sam" と言う言葉は現在，「米国の連邦政府，米国国家」を擬人化して表現する場合に用いられることは周知のことである。ところで，この言葉はどの様に誕生したのであろうか。"Uncle Tom" はハリエット・ビーチャー・ストウにより書かれた『アンクルトムの小屋』から，また "Aunt Jemima" はパンケーキ・ミックスの製品名から，それぞれ生まれている。そのどちらもが白人により，彼等の目的に合わせて創作された。つまり前者は奴隷解放の目的から，また後者は新製品をより魅力的に見せる目的から生み出されたのである。それぞれの人物像が作られる際に白人社会が黒人に対して抱く固定観念的イメージが根底で働いたことは否定できない。それゆえに後世の黒人たちにより否定的意味合いを持つ言葉として扱われることになってしまった。それでは "Uncle Sam" の場合はどうであろうか。

その言葉の起源に関しては，ハーワード・ハーウィッツの本 "An Encyclopedic Dictionary of American History" の中でも挙げられているが，米国が英国相手に対戦した1812年戦争と関係がある。彼によると，その時米国の兵士の軍服に "U.S." と言う文字が付いており，その戦争に反対した人達がそれを "Uncle Sam" を意味していると解釈し，それらの兵士達を揶揄したことから始まったとされている。そして1853年に初めてその戯画が登場するが，そのずっと以前から連邦政府と同義語として使われていたとハーウィッツは述べている(1)。

一方，"Dictionary of American History" の中でも "Uncle Sam" に関して「1812年戦争中に

初めて使われたその言葉は税関の係官や兵士たちに対して戦争に反対した人々により幾分嘲笑的に使われた，しかしいわゆる“war hawks”と呼ばれた戦争賛成派の人達はそれを使うのを避けた……その言葉は多分兵士の制服や連邦政府の所有物に付けられた“U.S.”と言う文字を滑稽に拡大発展させたものであろう」[2]とハーウィッツとほぼおなじ説明がされている。

それらの説明に共通しているのは，1812年戦争の時兵士の軍服に付いていたアメリカ合衆国を意味するイニシャルから相手をからかうために作り出されたのがその言葉の起源である点である。しかしその“Uncle Sam”と言う言葉がどうして揶揄する言葉として使われたのかについては言及されてはいない。また戦争反対派が用いたとしても，その言葉に政治的な意味合いがどの程度含まれていたのかどうかも定かではない。しかし，そこに相手をからかう目的があったとすると，当然のことながら，少なくともその名前を言う側にも，言われる側にも，何の説明もいらず，自然にそのからかいの意図が通じなければならないのは確かである。当時の状況からすれば，当然言う側も，言われる側も白人と分類される人々が圧倒的多数であったと推測される。しかもそれは戦時中の兵士と戦争反対派との間で使われたとなると，その現場に居たのは大人に属する人々であったと考えるのが妥当であろう。その様に大人同士の間で使われたとしたら，その“Uncle”は子供が年上の人に向けて使う「おじちゃん」，「おじさん」の類いの意味合いでは揶揄する行為とは見なされなかったのではないかと推測される。そこで考えられることは，白人に対して“Uncle”と言う言葉が使われたわけであるが，黒人の名前にこの“Uncle”の称号が付け加えられる時と似たような事がこの場合にも作用したのではないかと言うことである。つまり，それは前回の紀要で既に言及しているように，小説『アンクルトムの小屋』の主人公の“Uncle Tom”は日本語にする際には「おじさん」よりも「おじいさん」と訳されている様に，年齢的に『年配以上の部類』に入る（英語では“elderly”と言う言葉が用いられている）奴隷に対して用いられた点である。この年齢的視点から考えてみると，英国を相手に精力的に戦うべき兵士たちに，「じいさん」，または「年配のおじさん」の意味合いが込められた“Uncle Sam”と言う言葉が向けられたとしたら，この言葉は相手を揶揄する役目を十分に果たしたことになるのではないだろうか。「役立たず」とまでは行かなくとも，「そんな年で戦えるのか」ぐらいの意味なら十分からかい言葉にはなったであろう。

当時，米国は独立国家として誕生してから日も浅く，再度英国を相手としたのがこの1812年戦争である。前回の独立戦争時はまだ大陸軍であったが，1812年戦争時には合衆国は常備軍としての合衆国軍を持っていた。しかしウェスト・ポイントに陸軍士官学校ができたのが1802年のことであり，陸軍の兵力は6,700名で，海軍は12隻の軍艦と4,000名の兵士と1,500名の海兵隊しかなく[3]，合衆国軍は明らかに戦備が整ってはいなかった。その上，戦争布告宣言に対して上院では，バーモントを除いたニューイングランド諸州とニューヨーク，ニュージャージー，デラウェアなどの海岸ぞいの中部諸州は反対票を投じていた。さらに，コネティカットやマサチューセッツは

州兵を派遣することすら拒否していた。そして "Uncle Sam" の言葉の発祥の地，ニューヨーク州は戦争反対票を投じただけでなく，その州兵軍は州内を防衛する事が任務であるという理由から1812年の10月ナイアガラ川を渡りカナダ側に進軍することを拒否した。その結果，対岸に進軍していた連邦の常備軍は援軍を得られず，英国軍に降伏せざるを得ない事態まで生じていた。この様に州兵すらも統括できない状況では合衆国軍が英国相手に，勇猛果敢に戦っているとは見なせない人がいたであろう。当然の成り行きで，その様な，ある意味では弱体な軍隊自体が戦争反対派にとっては揶揄の的となり得たであろう。それゆえにある特定の人物ではなく，軍全体を揶揄する目的には彼等が一様に身の回りの物に付けた "U.S." と言うイニシャルは格好の材料になり得たであろう。それを見た者が多分からかい半分に語呂合わせの言葉を考え，親しみを込めているようで，実はその軍隊の威厳を軽んじる効果を持つ，「年配のサムおじさん」が出来上がったのではないだろうか。兵士たちも自分たちの軍隊の状況は分かっていたであろうから，その言葉を聞き，からかわれていることを悟ったであろう。この様に考えると，"Uncle Sam" の言葉が持つ揶揄の構図が見えてくる。

ところで，ここで興味深い点が浮上する。つまり，その "Uncle Sam" と言う言葉が最初に活字となって登場したのはハーウィッツによると，1813年の9月7日付けのニューヨーク州トロイ市の『トロイ・ポスト』紙と言う新聞の中であった[4]。一方 "Uncle" と言う言葉が黒人奴隷に対して使われ始めたのが1820年代から30年代である。この事は "Unlce　Sam" の方が "Uncle Tom" よりも先に誕生したことを示している。それは後者の出現に何らかの影響を及ぼした可能性すら示唆している。少なくとも "Unlce" と言う言葉がその当時既に，米国社会の中で，姻戚関係に関係なく，「年配のおじさん」，さらには「おじいさん」の意味合いを持っていた確率はかなり高いと言えるであろう。さもないと，「サムじいさん」，「年配のサムおじさん」と言う揶揄目的は成立しなくなるからである。

"A Dictionary of American English on Historical Principles" (DAEHP と略す) は，"Uncle" と言う言葉に関してそれは「その話し手とは姻戚関係のない男性，特にかなり年配の男性に話しかけたり，言及したりする時に使われる親密さ，情愛，または敬意の念の言葉」[5] であるとして，その意味での使用に関して "The Oxford English Dictionary" (OED と略す) の定義を引用し，それは1793年から，"Local and U.S." つまり「特定の地方に限られ，そしてアメリカ合衆国に於いて」用いられていると述べている。その後者の辞書 (OED) が挙げているその最初の活字となった例は「コーンウォールではかなり年配の人全てに彼等の名前の前にアーントまたはアンクルを付けて呼ぶのが普通である」[6] と言う記述である。このコーンウォールと言う地名はイギリスのものである。一方前者 (DAEHP) の辞書がアメリカで最初に使われた例として挙げているのが1813年のもので，"Bring your plots and your intrigues, Uncle Tim, And let's all be tories together." (あなたの策略と陰謀をアンクル・ティムに持って来なさい，そし

て全員で一緒に英国支持者になろう)[7] と言うものである。この後者の例は1812年戦争と時を同じくしている。これらのことからだけでは，この "Uncle" の使い方が当時米国で一般的に用いられていたかどうかは判断できない。しかし少なくともこの種の使い方が存在しており，その米国での最初の例が明らかに1812年戦争に関連した記述の中に登場したことは動かしがたい事実である。さらに "Uncle Sam" が揶揄言葉として使われたとしたら，当時この種の "Uncle" の使い方がかなり知れ渡っていたことを物語っていると結論付けられるのではないだろうか。そして，この種の "Uncle" の用法がまず白人により白人に対して使われ，"Uncle Sam "が生み出され，それから白人により黒人奴隷を呼ぶ際にも使われるようになり，小説の主人公 "Uncle Tom" の誕生となり，その後黒人社会特有の使われ方に発展していった流れが以上のことから見えてくる。

ところで上記の 2 つの辞書の "Uncle Sam" の定義に関して見てみよう。前者の辞書（DAEHP）はその言葉は「1812年戦争の時軍隊に食料を供給していた畜殺会社の一員であった，ニューヨーク州トロイのサミュエル・ウィルソン（1768-1854）の知り合いたちの冗談のつもりの言葉がしばしばその起源とされる，樽の上に押されたイニシャルの 'U.S.' が検査官としての『アンクル・サム』・ウィルソンを表わすとしておもしろおかしく解釈されてきたと『決定的な証拠なしに』言われている。アルバート・マシューズは（"American Antiquity Society Proceeding" ..... の中で）その証拠を吟味検討した後，U.S.と言うイニシャルを単に拡大して『アンクル・サム』にしたものを事実と決め込む，より単純な説明に賛成し，この説明を捨てている」[8] と解説している。一方，後者の辞書（OED）は「その表現に関する由来は，A. Matthews により "Proceeding American Antiquity Society" ..... の中で明らかにされている ..... それが U.S. と言う文字を滑稽に解釈した物として生じたと言う示唆はその最初に記録された例と同じぐらい古い，そしてサミュエルと言う名前の別の政府官僚とそれを結び付けるその後の所説は根拠がないように思える」[9] と述べている。

そして "A Dictionary of Americanisms on Historical Principles" (DAHP と略す）は「この表現がニューヨーク州トロイのサミュエル・ウィルソンと言う人により霊感が与えられて生じ，その人物への関連があったと言う，しばしばなされる所説は確証を欠く。アルバート・マシューズは "American Antiquity Society Proceeding" ..... の中で，その表現はアメリカ合衆国を意味する U.S.と言うイニシャルを冗談で拡大した物から生じたと言う見解を支持している」[10] と述べ，これまでの 2 つの辞書と同じ人物の見解を典拠として示している。

ところで "The Oxford English Dictionary" は「それが U.S.と言う文字を滑稽に解釈した物として生じたと言う示唆はその最初に記録された例と同じぐらい古い」と記述し，国名イニシャル拡大説への支持を示唆しながらも，その証拠を提示していない。ところがこれまでの 2 つの辞書同様に1813年 9 月 7 日付けの『トロイ・ポスト』紙の記事を最初の記述として引用している 3 番目の辞書（DAHP）は，この前述の記述を立証するに足る長さの引用を載せているのである。

その引用は "'Loss upon loss,' and 'no ill luck stir [r] ing but what lights upon Uncle Sam's shoulders,' exclaim the Government editors, in every part of the Country....This cant name for our government has got almost as current as 'John Bull.' The letters U.S. on the government waggons, &c are supposed to have given rise to it."(11) と他の2つよりも倍以上長い。その引用文の内容から，確かに当時 "Uncle Sam" と言う言葉が英国人を指し示す "John Bull" と同じぐらい一般に知られており，政府の馬車に付いている "U.S." と言う文字がそれを生じさせたと推定される点が分かる。ところでこの新聞記事の記述がありながらそれぞれがイニシャル揶揄拡大説を完全支持するのを避け，1908年にアルバート・マシューズが発表した見解を引用し，その見解への支持を示唆することに止めたのは，引用文の最後の部分で使われた "are supposed" の言葉が影響しているのではないかと思われる。またこの由来に関するもう一つの「サミュエル・ウィルソン」モデル説を完全に否定や肯定するに足る十分な資料がこれらの辞書を編纂した際には見付からなかったものと推測される。

ところでもう一つの説を支持したのがリチャード・シェンクマンである。彼は彼の本の中で，サミュエル・ウィルソンが "Uncle Sam" のモデルであり，1812年戦争の時ニューヨーク州のトロイ市の辺りに駐屯していた軍隊に肉を供給し始めた人物と断定している。シェンクマンはさらに実在の人物の名前が国家を象徴する名前として使われるようになった経過を詳しく書いている。それによると，その兵士達に送り届けられた肉にはアメリカ合衆国を意味する "U.S." の文字が押されてあり，ある日政府の検査官が肉を調べにやって来た時，ウィルソンの店にいた一人の「想像力に富んだ」従業員がそのイニシャルがウィルソンの愛称の "Uncle Sam" を意味するのだとその検査官に告げた。それがきっかけとなり，直ぐに連邦政府の供給物資は "Uncle Sam" のものと言われるようになり，次第に "Uncle Sam" が連邦政府自体を意味するようになったとシェンクマンは述べている(12)。

さらに "Dictionary of American History" もシェンクマンと同じ説を支持している。その上，その名前は「また政府に何樽もの牛肉を供給した『アンクル・サム』・ウィルソンとして知られていたニューヨーク州トロイのサミュエル・ウィルソン（1766年〜1854年）と同一であると認定されてもいる。1961年に連邦議会はウィルソンをアメリカの象徴がその名前を取った人物として公認した」(13) とはっきりと述べている。

その政府による統一見解を可能にしたのは，シェンクマンによると，ある学者の一つの発見であった。シェンクマンはその学者の名前を明らかにしていないが，その人物は1812年戦争の時トロイ市の軍の駐屯地で，検査官と店の従業員のやり取りが交わされた，まさにその現場に居合わせた兵士の話が引用されている1830年の新聞記事を1961年に発見している。そして，それが決定的証拠となり，連邦議会が "Uncle Sam" のモデルはウィルソンであると正式に宣言できたとシェンクマンは述べているのである(14)。シェンクマンはイニシャル揶揄拡大説には言及していな

い。一方 “Dictionary of American History” は既に引用している様にイニシャル揶揄拡大説を述べた後に，ウィルソンがモデルであることに言及し，その両方の説を同等に正しいとする姿勢を示している。全ての辞書に全く誤りは無いとは言えないであろうが，辞書の性格上，編集段階で詳細な裏付け調査やチェックがなされるであろうから，そもそも連邦議会が公認した事実が無ければ，ウィルソンがモデルであったと言う解説の中でこの記述は削除されたに違いないと思われる。またこの辞書だけでなく，シェンクマンの本も公認の事実に言及していることからも，この公認の事実はあったと言えるであろう。

しかしこのサミュエル・ウィルソンの愛称から “Uncle Sam” と言う言葉が発生したのが先であるのか，それとも反対派が揶揄の目的で考え出した方が先であるのか，それともそのサミュエル・ウィルソンの愛称を偶然知っていた人物が検査官と従業員のやり取りは知らずに，しかしその愛称が語呂合わせにぴったりなのに気付き，その言葉を考えだした可能性はあるのかは断定できない。しかしアメリカ合衆国を意味する “U.S.” と言うイニシャルがその全てに共通して存在している点は動かしがたい事実である。そしてその言葉の誕生過程がその内のどれであれ，その呼び名の由来がはっきりと記録されたり，伝承されることも無く，その言葉だけが一人歩きし，世間一般に知られるようになったことは，その言葉の発祥の地であるトロイ市の，当然その地域で起こったことに関しての情報に通じていると思われる地元新聞の記事の内容（“are supposed” の部分）からも伝わってくる。また連邦議会によりウィルソンがその呼び名のモデルであるとする公式見解を発表しなければならなかった事実からもその点は容易に推測できることである。結局，その言葉の起源に関しては２通りの説があり，そのどちらもが公認されていると言えるだけである。つまり，その言葉は国名のイニシャルを見た者により政治的揶揄が加味された語呂合わせの産物であるだけではなく，実在の人物の名前にも由来していることになる。

ところで，たとえそれが地方紙の記事とは言え，早くも既に1813年の段階で，その揶揄的要素，つまり否定的なニュアンス，への言及はされず，米国政府と言う肯定的イメージを持つ言葉として扱われている点は注目に値するであろう。この点に関しては黒人の “Uncle Tom” とは逆の方向を辿ったことになる。後者の場合は小説『アンクル・トムの小屋』を通して奴隷制度の中で「良い黒人奴隷」と呼ばれたトムの生き方は英雄視された。しかしその枠組みの奴隷制度が廃止され，糾弾される過程で奴隷制社会の維持者である白人社会に迎合したと解釈され，当然のことながら否定的イメージが植え付けられていった。そして黒人社会の中ではこの “Uncle” と言う言葉が名前に付け加えられるだけで「白人に迎合する人」を意味するまでに否定的要素が定着してしまうことになる。さらにこの意味での “Uncle” の使用は他の少数民族集団の社会の中にも波及している。例えばネイティブアメリカン（アメリカインディアン）により1970年代頃までには使われ始めていた “Uncle Tomahawk” と言う言葉は「多数派の文化の行動を真似たり，取り入れたりする」人を意味している[15]。それ程 “Uncle” の持つ否定的要素は強いままであり，他

の少数民族集団にまで浸透していることが分る。

一方，この“Uncle Sam”はたとえ揶揄目的であったとしても白人が白人に対して用いたものであり，決して何か人種に関係した否定的な固定観念的イメージと結び付けられていたわけではない。しかもサミュエル・ウィルソンをそのモデルとする場合でも，周囲の者から呼ばれていた愛称の“Uncle Sam”は既に引用した辞書（DAEHP）の中の“Uncle”の定義どおりに「親密さ，情愛，または敬意の念」を表していると思われるので，そこから否定的なイメージは生み出されなかったであろう。軍との取り引きを許される程の業者である彼に非難される点があるとしたら，その軍と商いをしていた点ぐらいであろう。そこから否定的な要素が生まれて来る可能性はほとんど考えられない。しかも“Uncle Tom”や“Aunt Jemima”の様に，それぞれ小説と製品のパッケージの形で，一般の人々の記憶にインパクトの強い一定のイメージを刻み込んでしまう様な創作物はなかった。視覚的に訴える戯画とも言えるイラストが誕生したのは1853年で，既に引用したハーワード・ハーウィッツの定義でも述べられている様に，そのずっと前から連邦政府と同義語として用いられていたので，視覚的な意味でも後世の評価の逆転や批判を生む要素はなかったと考えられる。連邦政府を象徴する言葉ゆえに暗黒街で1940年代までには「連邦政府の捜査官」の意味で使われるようになった例はあるが，それすらも否定的イメージを暗示する展開とは言えず，その種の展開にはならなかったと言えるだろう。また白人社会は少数民族集団の視点からすれば，社会の主流に属する人々であり，人種的に「多数派に迎合する人」の存在そのものが有り得ないことになる。その結果，“Uncle Sam”と言う言葉から，“Uncle”の称号を付けて否定的意味にする語法は生まれようがなかったと言えるだろう。

ところで，国家，または連邦政府を連想させる呼び名に対して擬人化された姿が与えられたのは，ハーウィッツの説に従えば1853年である。当時米国の国家を象徴するものに「ハクトウワシ（アメリカン・イーグルと呼ばれる）」がいた。それは1782年６月20日に既に国家の公文書に用いる印章として公式に認めれ，1785年に既に公文書に登場し，1776年以来様々な貨幣の模様にもなっており[16]，1853年当時，ある意味で国民の間での知名度も高かったと考えられる。この猛禽類の王者の風格のある精悍な姿の「アメリカン・イーグル」に対抗できるのは実際に米国政府を動かし，国家を象徴できる立場にある大統領しか他になかったであろう。大統領であれば，国民は国家の象徴として抵抗もなく受け入れることができるであろうし，より容易に国家や政府を連想できるであろう。“Uncle Sam”のイラストがこの世の中に登場したのは，南北戦争真っ最中の1853年である。周知の通り，その当時連邦政府の頂点に立つ米国大統領はアブラハム・リンカーンであった。“Uncle Sam”がアブラハム・リンカーンに非常によく似た風貌をして登場することになった理由の１つはこの辺りに在りそうである。

そのリンカーン似の“Uncle Sam”は背が高く，痩せて，白い髭をはやした白人男性である。彼は燕尾服を身に着け，シルクハットを被り，正装をしている。これは国家を象徴する存在であ

るに相応しいことが瞬間的に伝わる。しかし，じっくりとその姿を眺めてみると，ズボンは縞模様で，シルクハットには星模様のバンドが着いていることが分かる。実際カラー表現される場合には燕尾服の色は青で，ズボンは赤と白の縞模様になる。つまり“Uncle Sam”は明らかに米国国旗，星条旗を全身に付けているのである。それにより彼の姿にはユーモラスな面が加味され，“Uncle Sam”と心安く呼べる存在に変身させられている。ところでこの国旗から作られたと思われる様な赤と白と青のコスチュームは“Uncle Tom”の否定的イメージを固定化する際に多大な影響を与えたミンストレル・ショーを始めたとされているトーマス・ライスと同じ名字を持つやはりミンストレル・ショーに出演していたダニエル・ライスの舞台衣装から採られたとも言われている(17)。ロバート・トールは彼の本の中で，ミンストレルショーの中で黒人の登場人物像の輪郭がはっきり示される前に白人自身についての「肯定的な舞台イメージ」が作られ，1826年から36年の間に，ジェームズ・ハケットと言う役者により，観客の普通の白人のアメリカ人を代表すると思わせる，ヨーロッパ人から「退廃堕落や気取りや腐敗を取り除いた良い特質を」持ち，田舎から出てきた「野暮な田舎者の様な服装をして，田舎の方言を話しながら痛烈なウィットとぴりっと辛辣な批評で『文明化された』社会を突き進む」ヤンキーと言う人物像がミンストレルショーの主要な登場人物として確立されたと述べている(18)。トールは“Uncle Sam”と言う登場人物やダニエル・ライスとの関係について言及してはいないが，ミンストレルショーと南北戦争との関係についてまるまる１章を費やす詳しい説明の中で，ミンストレルショーが観客の関心と世相を反映し，南北戦争に関する話題が舞台で取り上げられていた事を示し，この“Uncle Sam”と言う言葉が使われている歌詞の引用(19)もしている。これらの事から“Uncle Sam”が舞台に登場し，その舞台衣装がヒントになり，“Uncle Sam”の服装が生まれた可能性は非常に高いと言えるであろう。

結局，“Uncle Sam”と“Uncle Tom”のどちらの言葉にも共通する点はまず第一に姻戚関係の無い，“elderly”な男性に対して用いられる“uncle”の用法から生まれた点である。そして第二に，その誕生には前者は1812年戦争と，そして後者は南北戦争と，共に戦争と関係がある。そして第三にどちらもミンストレルショーと関係がある。そして第四に，それらの言葉とイメージは共に白人により作り上げられた点が挙げられる。この最後の共通点は，同時に最大の相違点を生み出した原因でもある。前者は白人により作り出された白人像であり，後者は白人により作り出された黒人像である。そこに白人の持つ人種意識や社会政治的指導者の立場が反映されたのは自然の成り行きである。その結果白人の“Uncle Sam”は米国社会の中で国家や政府を象徴し，一方黒人の“Uncle Tom”は奴隷制度の中で「良い」奴隷，その後は黒人社会の中で白人に迎合する人を意味するようになったのである。同じ“Uncle”の称号を持ちながらも，第四の共通点によりそれが象徴する意味に天地ほどの差を生じさせている点は明白である。そしてその相違はそのままその両人種集団が置かれてきた人種状況を物語っていると言えるであろう。今後米国の

人種構成が変化し，白人以外の人種の人が，または女性が大統領になる事態が生じた場合，国家や政府を象徴する言葉やイラストは変化を受けることになるであろう。また将来，社会の主流人種が白人からヒスパニック系に変わり，彼等が実質的に社会の実権を握る時代が来るとすれば，白人も黒人も共にマイノリティー集団となり，もはや「白人に迎合する黒人」は意味を成さなくなると想像される。こう考えてくると，この二つの言葉がまさに人種要因とは切っても切れない関係にあり，これらの言葉に現在までのところ大きな変化が見られないことは白人と黒人の置かれてきた人種状況が根本的には変化していない証拠と言えるであろう。

〈注〉

(1)　参照：*An Encyclopedic Dictionary of American History,* Howard L. Hurwit, Washington Square Press, New York, 1970, p.669.

(2)　引用：*Dictionary of American History,* revised edition, Vol. VII, Charles Scribner's Sons, New York, 1976, p.137.（筆者翻訳）

(3)　参照：「新米国史」，中屋健一，誠文堂新光社，東京，1988，pp.119-120.

(4)　参照：*An Encyclopedic Dictionary of American History,* p.669.

(5)　引用：*A Dictionary of American Englsih on Historical Principles,* eds., Sir William A Craigie, James R. Hulbert, The University of Chicago Press, Chicago, 1968, p.2387.（筆者翻訳）

(6)　引用：*The Oxford English Dictionary,* 2nd edition, Volume XVIII, Oxford University Press, Oxford, 1989, p.908.（筆者翻訳）

(7)　引用：*A Dictionary of American Englsih on Historical Principles,* p.2387.（筆者翻訳）

(8)　引用：同上。（筆者翻訳）

(9)　引用：*The Oxford English Dictionary,* p.908.（筆者翻訳）

(10)　引用：*A Dictionary of Americanisms on Historical Principles,* Vol. II, ed., Mitford M. Mathews, The University of Chicago Press, Chicago, 1951, p.1793.（筆者翻訳）

(11)　引用：同上。

(12)　参照：*Legends, Lies, and Cherished Myths of American History,* Richard Shenkman, Harper & Row, Publishers, New York, 1989, pp.166-67.

(13)　引用：*Dictionary of American History,* Revised Edition, Vol. VII, p.137.（筆者翻訳）

(14)　参照：同上。

(15)　引用：*Dictionary of American Slang,* 3rd edition, eds., Robert Chapman and Barbara Ann Kipber, HarperCollins Publishers, New York, 1995, p.573.（筆者翻訳）

(16)　参照：*An Encyclopedic Dictionary of American History,* p.205. 公認された日付に関する参照：*The Almanac of American History,* ed., Arthur M. Schlesinger, Jr., Bramhall House, New York, 1986, p.136.

(17)　参照：*The American Heritage Encyclopedia of American History,* ed., John Mack Faragher,

Henry Holt and Company, Inc., New York, 1998, p.954.

(18) 引用・参照：*Blacking up,* Robert C. Toll, Oxford University Press, London, 1974, pp.13-14. (筆者翻訳)

(19) 参照：同上，pp.105-133.

〈参照〉

Chapman, Robert, Kipber, Barbara Ann, eds., *Dictionary of American Slang,* 3rd edition, Harper-Collins Publishers, New York, 1995.

Craigie, Sir William A.,Hulbert, James R.,eds., *A Dictionary of American Englsih on Historical Principles,* Vol. I, The University of Chicago Press, Chicago, 1968.

Faragher, John Mack, ed., *The American Heritage Encyclopedia of American History,* Henry Holt and Company, Inc., New York, 1998.

Hurwitz, Howard L., *An Encyclopedic Dictionary of American History,* Washington Square Press, New York, 1970.

Mathews, Mitford M., ed., *A Dictionary of Americanisms on Historical Principles,* Vol. II, The University of Chicago Press, Chicago, 1951.

Schlesinger, Arthur M., Jr., ed., *The Almanac of American History,* Bramhall House, New York, 1986.

Shenkman, Richard, *Legends, Lies, and Cherished Myths of American History,* Harper & Row, Publishers, New York, 1989.

Simpson, J. A., Weiner, E.S.C., eds., *The Oxford English Dictionary,* 2nd edition, Vol. XVIII, Oxford University Press, Oxford, 1989.

Toll, Robert C., *Blacking up,* Oxford University Press, London, 1974.

Dictionary of American History, revised edition, Vol. VII, Charles Scribner's Sons, New York, 1976.

中屋健一，『新米国史』，誠文堂新光社，東京，1988